

## 『鐘氷る夜』

二口峠を命からがら越えたミチは、仙台で暫く身体を休めたあと日光に向かった。

既に年の瀬が近づいている。年内には江戸に入ろうと決めていた。

奥州街道をひたすら下って大田原の旅籠に入った。泊りの客に始終尋ねられるのが煩わしいのか、宿の柱に、日光まで十三里、と書かれた札が下がっていた。

続けて、大渡まで十里、とも書かれている。一気に日光まで歩くのが難しい場合は大渡で泊りになる、ということだろう。

昨日から気温が下がり始め、今夜はひとときわ冷たい。粗末な旅籠の廊下は外と変わらないくらい底冷えがした。

部屋に案内をする女中の後ろを歩きながらミチは思わず両手の指先に息を吹きかけた。すると女中が持つ手燭の明かりに、吐いた息が白く浮き上がって見えた。

明け七つ(午前四時)、早立ちの人達が動き出す気配に目覚めた。

今日のうちに今市に入るつもりでミチも大急ぎで仕度を整え帳場に降りた。

勘定を済ませ表に出ると、墨を塗り込めたような暗闇から

押し寄せる冷え切った空気が、キリキリと頬に刺さった。

軒行燈に照らされた地面が粉を敷いたように白い。止んではいたが、道中は雪になりそうだった。

矢板を過ぎた頃から時折雪が舞うようになった。高原山を駆け下りて来る冷たい風が、乾いた雪を運んで来た。

雪の量は多くなかったが、風は今までに経験したことのない冷たさだった。着ている物を通り抜けた寒気が、まるで針のようにミチの身体に突き刺さった。

日暮れには今市まで辿り着きたい。ミチは前を向いたまま何にも考えずに歩き続けた。

宿で頼んでおいた弁当は、ひと気が少ないのを幸いに歩きながら食べた。

女のすることではないな、と思ったが、立ち止まれば氷つてしまいそうだし、何よりも気持ちは急いだ。

用心して懐に入れておいたので握り飯はほんのり温かだった。だが、竹筒の水は氷っていた。水を飲めない握り飯が喉につかえた。

胃の腑が満たされると風の冷たさが少し和らいだように思え、足取りは軽くなった。どうにか日暮れ前に今市に入った。

旅籠で教えられた湯屋で、数日ぶりにお湯に浸かった。凍えていた手や足先に、チリチリと血が通い始めるのが分る。先客が二人上がってしまったと、湯殿はミチだけになった。

灯皿の芯が時折ジリジリと音を発て、立ち込めた油煙が喉を突いた。湯が揺れる音だけが響いて静だった。

宿に戻り行燈の傍で、すっかり冷たくなつた夕飯をひとりであたためておいて、湯屋で温めた体がたちまち冷えてきた。

昨日今日の冷え込みはなまじつかではない。

去年の秋に長府を発つた後、冬は大方難波で過ごした。本願寺の報恩講に向かう道中で雪に難儀をしたこともあったが、今日のこの寒さは田耕でも長府にいた頃にも覚えが無い。空気そのものが氷っているのではないか、と思われる寒さであった。

その氷おろついた空気を震わせて、遠く暮れ六つの鐘が聞こえて来た。東照宮の梵鐘と思われた。その鐘の音までが、今日のミチにはまるで氷っているように聞こえた。

ミチは思いついて包みの中から一通の手紙を取り出した。出羽の書家、五松宅で書の手ほどきを受けている折に届いた、弟多門次からの手紙だった。

「旅のご安全を念じつつ一筆啓上申し上げ候」という書き出しの手紙の内容はおおよそこのようなものだった。

その日、隣町の道場との対抗試合を控えた剣術の稽古は、普段より長く激しかった。

自宅に帰り着いた多門次は、先ずカラカラに乾いた喉を潤し玄関から入ろうと思ひ井戸の方に廻った。すると縁側に丸

く座つた母タカの姿が目に入った。何かを包み込むように両手を胸の前に抱えている。

声をかけようとした多門次だったが、どこかためられる空気を感じ水も飲まずに玄関に引き返した。

普段通り

「ただいま戻りました！」と大きな声をかけると、少し遅れて「お帰りなさい」と母親の声が出た。

部屋に入ると、タカが踏み台上がり何かを神棚に戻すところだった。

多門次はすぐにそれが何であるのか判った。ミチのへその緒だったのだ。そしてその日がミチの誕生日であることにもすぐに思ひあたった。

手紙は

「母も案じ候はば一日も早い御帰郷を念じ居り候」と結んであった。

長府を出て一年半になる。父や母、それに兄妹のことを忘れたことは無いつもりだった。

だけどミチが思う以上に親は娘を案じ、弟達は姉を気遣っているに違いないのだった。

ミチはせかさされるように矢立を取り出し、行燈の明かりを頼りに

『鐘氷る夜や父母のおもはるゝ』の一句をしたためた。

芯から氷りつくような夜だったが、多門次の手紙を読み、家族を思い出したミチの胸の中は温かだった。

明日、東照宮にお参りをしたあとは、一気に江戸に向かう。